

DX NEXT GIGA、データ活用で「心のケア」推進

千葉県L-Gateを核に教育DX加速
教員研修も“未来の教室”で刷新
内田洋行

GIGAスクール構想により1人1台端末の「配備」が全国で進んだ教育現場は、NEXT GIGAに向けて、学習活動や校務に関するデータを生かした「教育の質の向上」へと軸足を移しつつある。内田洋行は15日、千葉市中央区の千葉県文化会館でイベント「EduNEXTちば～つながる学びの架け橋～」を開催し、教育データ活用の具体策を発信した。千葉県は学習eポータル「L-Gate」の県立高校での全校導入を進めるなど先進的な取り組みで知られ、当日は県内の教育関係者らがデータを活用した現場改善の方向性を共有した。

イベントの冒頭、千葉県教育庁の生田勲ICT教育推進室長は、レコードからストーリーミングへの変化を例に、デジタル化とDXの違いを説明し、「デジタルの力でリアルな学びを支える」重要性を強調した。生成AI（人工知能）を含むデジタル学習基盤や教育データの利活用を通じ、生徒一人一人が成長を描ける学習環境の実現を目指すと言った。さらに、学びを学校内にとどめず生涯につなげる「学習エコシステム」にも言及。産官学連携による教育データ活用で、生徒が主体的に学びを選択できる環境を目指す姿勢が印象的だった。

L-Gate核に「配備」から「活用」へ

「L-Gate」は、学習eポータルとして、学習系・校務系の情報を連携し、教育DXを支える共通基盤として位置付けられている。県域で共通に活用できるプラットフォームを整えることで、学校現場の取り組みを支援し、データを起点とした授業改善や校務

の高度化を支援する。

L-Gateには、児童生徒の状態を日々把握するための記録機能（「毎日の記録」など）が用意され、端末から短時間で直感的に回答できる。回答は蓄積され、推移を見やすく可視化できるため、教員が継続的に状況を把握しやすい設計となっている。教育委員会や各学校のニーズに応じて設問内容を設定できる点も特徴で、現場の運用に即したデータ活用を後押しする。

可視化で「小さなSOS」察知

内田洋行・地域デジタル化推進部の広野健氏は、いじめや不登校などの課題に対し「問題が表面化する前の未然防止が重要」と指摘する。記録機能では、例えば生活習慣に関する項目や、教員に直接言いにくい悩みを記述できる欄なども設け、日常的な気付きを得ることができる。

回答の変化を継続的に捉えることで、児童生徒の小さなSOSを早期に察知し、声かけや支援につなげる契機になるという。

千葉県内では旭市の事例も紹介された。教育委員会が設問を配信して横断的に状況を把握する運用や、各学校が独自の設問を設定して教育相談の基礎資料とする活用が示され、記述欄を通じた発信が、対面では把握しにくい悩みの把握に役立つとした。

教員研修も刷新、「Future Class Room」で体感

千葉県総合教育センターの主席研究指導主事、岡松英雄氏が登壇し、ICTを授業に取り入れ、学習データを踏まえた指導改善の重要性が高まっていると指摘。児童生徒の理解度や進捗を把握し、習熟度に応じた支援につなげる授業づくりの必要性を強調した。

同センター内に整備された「Future Class Room」は、教員が“未来の教室”

を体験し、実践に還元することを目的とした研修空間。内田洋行が教室デザインや学習環境設計に関わり、ICT機器の配置や協働学習を前提としたレイアウト、映像配信設備やVRなどの先端技術を備え、具体的な活用イメージを持てる環境を整えている。

岡松氏は「研修は参加するだけでなく、振り返りが重要」と述べ、研修履歴システム「Plant」を活用した計画的な人材育成や、生成AI・情報セキュリティ分野の研修強化にも言及した。ニーズの高い生成AIや情報セキュリティなどの研修強化を進める方針で、研修の質と実効性を高める。

イベントを通じ、学習系・校務系データを横断的に活用することが、教職員の負担軽減と教育の質向上を両立する鍵であることが示された。千葉県が推進するL-Gateを核とした基盤整備と、Future Class Roomを活用した研修の高度化は、NEXT GIGA時代の教育DXを具体化するモデルケースとして注目されそうだ。



④「L-Gate」について説明する内田洋行の広野氏



⑤千葉県総合教育センターの岡松氏は「Future Class Room」について説明した